

雑草通信

船津好明 1936年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。学問的でない表現を目指します。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

生物多様性のこと(1)

(本稿執筆中の背後意識：地球環境問題)

生物多様性とは、地球に色々な生物がいることを意味する。生物には植物も含まれる。地球環境保全の観点から、生物の多様な状態を維持して行こうという考え方には大筋で賛同できるし、その意味合いには深いものを感じる。国際会議も重ねられ、方向付けがなされているが、実行は簡単でない。

生物多様性という言葉に並んで、生態系という言葉がある。この2つは関係が深い。生態系は、色々な生物が互いに係わりあって“一つのまとまり”を形作っている状況を指す。一部の地域、水中、空中についても言い得るし、地球全体についても言える。

生態系は常に変化している。関連して生物の多様な状態も変化している。ある生物の個体数が増えたり減ったり、絶滅したり新たに発生したり、これらは人類が誕生する以前からある。人類が原始生活をしている間も続いた。その後文明が発祥し、開け、進んで現代に至って、人間は自分達の活動が生態系に影響を与え、生物多様性の低下を助長してはいないかと疑い始めた。特に問題視したのは生物の絶滅についてで、例えば鯨や象などの大型動物の減少の原因は人間の活動にあるとされ、その絶滅が危ぶまれ、保護のための努力が既に始まっている。大型動物は、減らすことは簡単だが増やすことは容易でない。その他の生物の極端な減少も、人間の活動が直接の原因、あるいは間接的な原因、あるいは思いもよらない遠因を含めると、例は少なくない。既に絶滅した生物もある。

ある種の生物の異常な増加も、生態系を損なうことに繋がると考えられる。増加の原因が敵となる生物の減少によるものかどうかは一概に言えないが、その増加がまた他の生物の種の減少に繋がるかも知れない。そのため生物は、異常に減少しても増加しても、生物の種の減少、即ち生物多様性の低下に繋がる恐れがある。

生物の絶滅や、異常な増加や減少が直接または間接に、人間の活動によるとされる例は多いが、前記のように生態系の変化は人類誕生以前からあり、何が原因で絶滅したのか、あるいは現在絶滅の危機に瀕しているのか、あるいは激増しているのか、がはっきりしない場合がある。しかし原因が何であれ、絶滅しそうな生物を絶滅から救い、増え過ぎた生物を減らすのが生物多様性維持の基本的な立場であろう。生物多様性の維持は環境を守り、人間の利益になる、とは人間の立場でいうもので、他の生物の利益になるかどうかは、別の話である。

生態系の変化は太古の昔からあり、種は進化と退化を経ながらも、多様化の方向で増えてきた。そして種は盛衰を繰り返してきた。種は構成が一定ではなく、変化する。全ての種は自己の勢力を伸ばす本能を持ち、生存競争は止むことがない。種の構成は変化するのが自然の流れである。「無常」という言葉があるが、生態系に当てはまる。

一方現在の人間は、ある種の生物が減り過ぎれば増やし、増え過ぎれば減らすことによって生物多様性を保とうとする。言い換えれば、種の構成の大きな変化を避けたいというもので、それは地球環境の保全に寄与し、人間の利益になると考えている。即ち、人間が生態系を調整しようというものである。これは自然の流れに逆らう部分もあるが、生物の激減や激増を人間が引き起こした例を反省して出てきた考え方と言える。即ち、人間は自ら歪めた環境を、自ら修復しようとしているのである。なお、遠い

過去には大隕石（小天体）の落下によって生物の大規模な絶滅があったという説がある。これは人間の活動には関係ない。氷河期もそうだが、これらについては脇に置く。

生態系の変化は地球の温暖化などの気候変動が原因であるとする説がある。しかし気候変動を来たした原因が人間の活動にある、とする主張もあり、それなら地球の温暖化は人間の活動がもたらしたことになる。ここ数十年の気温や海水温の上昇傾向は、温室効果ガスの排出量統計を見ても、人間の活動によることが裏付けられる。

生物の多様な状態を守ることに大筋で賛同する立場から、私は別の言い方ができることに気がついた。端的に、生物は全て生きる権利を常に等しく持っていて、人間も生物の一種である、と言えよう。生きる権利とは何かというと、易しい言葉が見つからないが、生きる本能と言うか、命の重さと言うか、そんな感じがする。生きる本能の強さが生物ごとに同じか違うか、測る尺度がないから同じというほかはない。もし違うと言うなら、どのように違うかで事が複雑になり、結局行き詰ってしまう。命の重さについても均等とする。どの生物も自己あるいは種族の立場において、自己や種族の生命を一番大切に。命の重さを測る尺度はない。

言い換えれば、生きる権利に生物による優劣はない。優劣があれば劣る生物は絶滅の道を辿ることになる。生物の絶滅を許しては生物多様性は保てない。ある生物が非常に減ったからといって、生きる権利が強まる訳ではなく、増えたとしても生きる権利は弱まらない。更に生物の生きる権利は、人間への利害には関係ない。他の生物の利害にも関係ない。人間に有害な生物は生きる権利がないと考えるのは正しくない。人間に有害な生物は人間が殺すことがあるが、このことは殺される生物の生きる権利とは関係ない。前号で述べた人間（私）も猫も蚤も鼠も、生きる権利は同等である。人間が、人間を離れた立場でこう考えるのである。

こうして私は前記の を支持し、どんな生物も絶滅は好ましくないとする立場を取るが、もし、仮に人間に害のある生物は絶滅した方がよい、と考えるとどうなるか。ある種が絶滅すると他の生物の絶滅に繋がり、更に別の生物の絶滅を招き、絶滅の連鎖を生み、人間に有益な生物にも絶滅が及ぶ恐れがある。結局、巡り巡って人間に災いとなって返ってくるであろう。人間にとって有害な生物が人間の近くにいるときは、駆除するか、遠ざけるなどによって人間は身を護ることとし、有害生物であるからといって絶滅を図ることはよくない。人間にとって恐ろしい病原菌も他の生物に宿って、宿り主に有益に働いていることもありうる。実際、病原菌の絶滅は不可能である。前記の蚤は人間にとって有害無益であると断定するのは早計である。人間に有益な場面があることを我々が知らないに過ぎない。

かくして動物も植物も生きる権利に差異はない。路傍に茂る雑草と、美しい草花に生命の優劣はない。雑草を取り除いて花の苗を植えることは、人間が普通にすることだが、これは雑草の生きる権利を否定した行為ではない。雑草に価値なく、美しい花に価値をおくのは人間の美意識による。既に「雑草」という呼称が美意識を反映している感がある。美意識は多分に個人差があるから、雑草の方を美とし、色鮮やかな草花を醜とする人がいるなら、それもよい。生命という点で雑草も草花も、原理的に同じと考える。

次に として、ある生物が他の生物を殺すのは自己の生命や種族の維持、危害の防止のみに限られるべきである、と言えよう。殺さないまでも、生物は他の生物から栄養を取って生きている。加えて人間は快樂のために他の生物を殺すことがあり、この点で人間は他の生物と違う。（続）